ＲＧＳ ～レトロゲームシスターズ～

沙φ亜竜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＲＧＳ　～レトロゲームシスターズ～

【Ｎコード】
Ｎ７０８５Ｙ

【作者名】
沙φ亜竜

【あらすじ】
父親を亡くした3姉妹。その父親が遺してくれた形見は、膨大な数のレトロゲームだった。
ゲームが大好きだった父親を思い返しながら、３姉妹はレトロゲームで遊び始めた。

小説……ではないです。レトロゲームをネタにした話です。
こういうのがアリなのか、食いついてくれる人がいるのか、わかりませんが……。

第0話　こうして3姉妹はレトロゲームを始めた

【序章　カイコの独白】

お父さんが、死んだ――。
私たち3姉妹にとって、受け入れがたい現実。
大好きだったお父さん。
もう笑いかけてくれることはない。
もう怒ってくれることもない。

まだ幼かったミコは泣きじゃくっていた。
いや、小学生だったチョコも私も、声を枯らして泣き続けたっけ。
でもお母さんだけは、私たちのそばで毅然とした態度を崩さなかった。
だけど私たちが寝入ったあと、声を押し殺して泣いていたのを、私は知っている――。

あれから数年――。

お母さんは私たちを養うため、必死に働いている。
お父さんはゲームが大好きだった。
その影響で、私たち3姉妹もゲームが大好きになった。

家計は苦しかったけど、お母さんは私たちがゲームするのを止めたりはしなかった。
お父さんが好きだったことを、お母さんも知っているから――。

ある日、お父さんの部屋にこっそり入った私たちは、見つけてしまった。
お父さんの遺した、宝の山のごとき、レトロゲームの数々を――。

☆☆☆☆☆

【愛する娘たちの日常】

さて――。

俺の愛する娘たちは、今どうしているかな。

もう俺が死んでから何年も経ってしまった。
俺のことなんて、すっかり忘れてしまっているかもしれない。
それならそれで構わない。すっぱり諦めて帰ることができるからな。

……いや、もちろん悲しいとは思うが。
だが、俺のことなんて忘れてしまったほうがいいのかもしれない。
娘たちには幸せになってほしいのだから。

懐かしの我が家が見えてきた。
少々怖い部分もあるが……。
のぞいてみることにしよう。

どれどれ……。

おっ。3人とも集まっているみたいだな。
おや？　あそこは俺の部屋のはずだが……。

……。

そうか。俺の宝物だった古いゲームを見つけたのか。
もちろん一番の宝は娘である彼女たちだったわけだが。

薄汚れた古いゲーム。
俺が死んだあとも、隠したままになっていたんだな。
隠していたというよりも、古いから仕舞っておいただけだったが。

とはいえ、娘たちにとっては時代遅れのゴミでしかないだろう。
こんな汚いのが残ってた。捨ててしまおう。
そんな会話の果てに、ゴミ袋に投げ込まれてしまう運命が待っているに違いない。

しかし、俺が苦笑まじりで思い描いたような展開にはならなかった。

チョコ「カイコ姉、これって……」

カイコ「ゲームねぇ～。しかも古いわ。さすがお父さん～」

ミコ「姉様方、おふたりとも、目がキラキラ輝いてますね」

チョコ「そういうミコこそ！　ほら、ヨダレ拭けよ！」

カイコ「ふふっ。私たち、ゲームが大好きだものねぇ～。お父さんの影響で」

ミコ「父様は神様です！」

チョコ「出た！　ミコのオヤジ信仰！」

ミコ「なんですか、チョコ姉様！　悪いとでも言うんですか！？」

チョコ「べつに悪かねぇけどよォ……」

カイコ「ふふっ。ミコはお父さんにべったりだったものねぇ～。
まだ幼かったけど、ミコが『おとうちゃま～』って呼ぶ声、
今でもはっきりと耳に残ってるわ～。
よちよち歩きで、まだ可愛かったのよねぇ～」

ミコ「ちょ……、カイコ姉様！　赤ん坊の頃のことなんて、忘れてください！」

カイコ「いい思い出よぉ～？　忘れたらもったいないわ～」

チョコ「そうそう。ミコをからかう、いいネタになるしな！」

カイコ「ふふっ、そうね」

ミコ「姉様方、いぢわるです……」

チョコ「まぁ、それはともかく……。このゲームの山、すげぇな！」

ミコ「ミコたちが今これを見つけたというのは、天国の父様のお導きかもしれません」

カイコ「そうねぇ……。それじゃあ、これから1本1本、みんなで遊んでいきましょう！」

チョコ「異議なし！」

ミコ「はい、カイコ姉様！」

……。

カイコ、チョコ、ミコ……。

俺の知っている頃からすると、随分と大きくなった娘たち。

3人とも、俺のことを忘れてなどいなかった。

しかも、俺の遺したゲームの山を――時代遅れの化石染みたゲームの数々を、喜んで遊んでくれるというのか。

ありがとう……3人とも……。
俺には、すでに流せなくなっているはずの涙が、心の奥底から込み上げてくるように感じられてならなかった。

せっかくだし、娘たちの様子をしばらくのあいだ観察してみることにしよう。
今の俺には、時間はそれこそ無限にあるのだから――。

☆☆☆☆☆

【人物紹介とルール解説】

＞i36213―4533＜

カイコ「というわけで、私が長女のカイコ、高校1年生よ～」

ミコ「カ……カイコ姉様、誰に喋ってるんですか！？」

カイコ「ふふっ、細かいことを気にしちゃダメよ～」

チョコ「突然家の中で自己紹介なんて始めて、
　　頭おかしくなったかと思ったぜ……」（ぼそっ）

カイコ「あら、チョコ。なにか言った～？」

チョコ「い……いやっ、なんでもない！」

カイコ「あら、そう？　ふふふ……」

ミコ「カイコ姉様、笑顔なのに怖いです……」

カイコ「ふふっ。私はおしとやかでか弱い女の子よ～。
　それはともかく。
　私はロールプレイングゲームとアドベンチャーゲームが大好きなの～」

チョコ「アドベンチャーっていうか、ノベルゲームだろ！　それもBLの！」

カイコ「ちょ……！？　そ……そういうのもやるってだけよ～！
　美形男子が出てくるゲームなら全般的に好きだもの～！」

チョコ「どちらにしても、ダメダメじゃないか？　カイコ姉、リアルではサッパリだろ？」

カイコ「うぐっ……！
　で……でも～、可愛い動物とかが出てくるゲームも好きだもの～！」

＞i36214―4533＜

チョコ「はいはい。今さらって感じだけどな。事実は事実なんだし。
　……ま、紹介を続けるぞ？
　オレは次女のチョコ、中学2年。アクションゲームが大好きだ！

格闘ゲームやアクションパズル、レースにスポーツなんかも得意分野だな！」

カイコ「つまり、暴れるのが好きなのよねぇ～」

チョコ「誤解を招く言い方すんなよ！」

カイコ「ふふっ、それにね、この子、可愛い女の子が大好物なのよ！」

チョコ「うあっ、カイコ姉、なにを！？」

カイコ「事実は事実でしょ～？」（ニヤリ）

チョコ「くっ……、仕返しってわけか……！　この悪女め！」

カイコ「ふふっ、チョコほどじゃないわよぉ～」

＞i36215|4533＜

ミコ「姉様方、ケンカはやめてください。お互いの暴露合戦なんて、見苦しいですよ？」

カイコ「あら、そうよね。さすがミコはいい子ね～。
　ってことで、この子が三女のミコ、小学校６年生よ」

チョコ「っていうか、暴露合戦ってなんだよ、ミコ！」

ミコ「ひゃぁ！　チョコ姉様、ほっぺたを引っ張らないでください～！」

カイコ「まぁまぁ、落ち着いて、チョコ。
ミコは、シミュレーションゲームや思考型のパズルゲームなんかを
好んでプレイする頭脳派なのよね」

ミコ「あとは、シューティングゲームなんかも好きですね。
昔ながらの弾幕系とか、そういったもの専門ですけど」

カイコ「そうね。ＦＰＳなんかだと、チョコの分野になるかしらねぇ～」

チョコ「こんな感じで、好きなジャンルが結構分かれてるってのが面白いよな！」

カイコ「ふふっ。
だからこそ、それぞれが好きなジャンルを担当するって形にできるのよね」

ミコ「ゲームは初見プレイのほうが楽しいでしょうから、
担当者はネットであらかじめ調べたりしてはいけないんですよね」

チョコ「そうだな！　そのほうが面白くなりそうだし！」

カイコ「ええ。担当者は順番になるから、
次はどのタイトルにするかを他の２人で決めておく感じね」

チョコ「担当者以外は、
ネットとかでいろいろ調べておいてＯＫってルールにする

んだよな！」

カイコ「ふふっ。そのほうが、いろいろとツッコミも入れられるしね～」

ミコ「……なんだかそのルールだと、
　ミコだけ思いっきり姉様方にからかわれそうな予感がするんですが……」

チョコ「気のせい気のせい！」

カイコ「そうよぉ～？
　ミコも普段のうっぷんを晴らしちゃえばいいのよ、チョコが担当のときにね」

チョコ「カイコ姉だって当然標的になるだろ！？」

カイコ「あら、ミコはそんな悪い子じゃないわよねぇ～？　ねぇ～～～～っ！？」（ずずいっ）

ミコ「うっ……。はい、カイコ姉様……」（ガタガタ）

チョコ「笑顔でその凄み……。カイコ姉……やっぱ悪女だ……」

カイコ「なにか言った～？」（にこにこ）

チョコ「い……いや、べつに……」

カイコ「ふふっ。とりあえず、最初の担当者はチョコに決定ね！
　異論はないわよねぇ～？」（にこにこにこ）

チョコ「う……、はい……」（がっくり）

ミコ「というわけで、最初の担当者はチョコ姉様になりました」

カイコ「それでは、次回第1話、お楽しみに～♪」

第０話　こうして３姉妹はレトロゲームを始めた（後書き）

こんな、小説とは言えない作品をお読みいただき、ありがとうございます。
レトロゲームをネタにした話を書いていく予定です。

題材にするゲームは、ファミコン、ＰＣエンジン、メガドライブに限定するつもりです。
（ＣＤロムロムとメガＣＤはＯＫ）

もし扱ってほしいソフトなどがありましたら、
感想ページやら作者宛てのメッセージやらでリクエストしてください。

でも、なんでもは扱えないわ。遊んだことのあるゲームだけ。（羽川翼風に）

第1話　スーパーマリオブラザーズ

カイコ「最初はやっぱりコレ。スーパーマリオよ～！」

チョコ「ベタだな！」

ミコ「ベタですね」

カイコ「ふふっ。でも、まずはこれをやっておかないとダメでしょ～？」

ミコ「なるほど……。メジャーどころを最初にやっておけば、マイナーなゲームを取り上げても大丈夫という考えですね」

チョコ「マイナー……というと、『ホッターマンの地底探検』とか！？」

カイコ「ちょ……！　それはちょっと、マイナーすぎ……」

チョコ「だったら、『バードウィーク』とか！」

カイコ「そ……それもかなりマイナーなんじゃないかしら……」

ミコ「ミコにはちんぷんかんぷんです」

カイコ「と……とにかく！　今回はスーパーマリオなんだから！他のゲームのことはいいの～！」

チョコ「はいはい。それじゃ、始めますかね～」

☆☆☆☆☆

チョコ「カセットを差し込んで……電源オン！
　このオモチャっぽさがいいよな、ファミコンは！」

カイコ「ふふっ、そうね。……ほら、タイトル画面よ～。さっさとスタートしなさいな」

チョコ「急かすなよ！」

ミコ「頑張ってください、チョコ姉様！」

チョコ「フフン、オレの腕前をとくと見よ！　おっ、敵だ！」

カイコ「クリボーね」

ミコ「ジャンプして潰すんです、チョコ姉様！」

チョコ「それくらい知ってるゼ！　ジャーンプ！　……おや？」

（ＳＥ）てれっててれっててて～

チョコ「うおっ、いきなり死んだ！」

カイコ「ありがちね～」

ミコ「カイコ姉、ダサいです」

チョコ「うっさい！　くそ～、ジャンプが弱すぎたってのもあるけど、

着地で避けようとしたのに、滑った感じだったぞ！？」

カイコ「ふふっ、少し滑る感じなのが、このゲームの特徴でもあるのよね～」

チョコ「『慣性』の法則ってやつか……。さすが、『完成』度の高いゲームは違うゼ！」

ミコ「ダジャレも滑ってますよ、チョコ姉様」

チョコ「うっさいっての！」

カイコ「気を取り直して、クリボーをやっつけちゃって～！」

チョコ「あいよ！　今度こそっ！　えいっ！」

（ＳＥ）ぺひょ！

チョコ「よし、やった！　……って、カイコ姉、どうした？」

ミコ「カイコ姉様、なにを身悶えてらっしゃるのですか？」

カイコ「この『ぺひょ』って音……！　最高だわ！　はう～ん！

はぁはぁ……。早く、もう一度……」

チョコ「……とっても変態な姉を持って、オレは恥ずかしいゼ……」

ミコ「大丈夫です。チョコ姉様も、負けず劣らず変――」

ゲシッ！（無言でチョップ）

ミコ「……やめてください、痛いじゃないですか。
それに、コントローラーを持ったまま暴れると、バグって止まりますよ？」

カイコ「ファミコンって、衝撃とかにかなり弱いものね～」

チョコ「フン！　オレだって静かにゲームしたいさ。
ま、先に進もう。『？』のブロックだな。確か、これを下から叩けば……」

ミコ「キノコが出てきましたよ、チョコ姉様！」

チョコ「わかってるよ。これを取って……よし、巨大化！」

カイコ「でも、どうしてキノコで巨大化するのかしら。
すごく怪しいキノコだわ。副作用とか怖いわね～」

ミコ「それに、どうして着ている服まで大きくなるのでしょう？」

チョコ「服が脱げたら18禁になるだろ！」

カイコ「……その理論だと、『魔界村』は１８禁ってことに……」

チョコ「揚げ足を取るな！　……おっ、この土管って確か……。よし、入れた！」

ミコ「土管に入るんですか……」

カイコ「鈴木義司（よしじ）先生ね～」

チョコ「いったいどこから、そういう知識を……。カイコ姉、年齢査証してないか？」

ドガッ！（無言で蹴り）

チョコ「痛ててて……。オレが悪かった！　許してくれ！」

ミコ「……ミコにはちんぷんかんぷんです」

☆☆☆☆☆

チョコ「２－１は地下ステージだな！」

カイコ「暗くて怖いわよぉ～？」

チョコ「フフン、オレにかかれば楽勝だゼ！　フラワーゲット！

ファイアーボールで蹴散らすゼ！　爽快爽快♪」

ミコ「どうして火の玉を撃てるのでしょうか？」

カイコ「……きっとあの花、激辛なのよ～」

チョコ「食べたってことかよ！」

ミコ「確かに食べられる花っていうのもありますが……」

チョコ「マリオはどっちかっていうと、花に食べられるほうだと思うぞ」

ミコ「パックンフラワーですね。あれもどうして、土管から生えてくるのでしょうか？」

カイコ「細かいことを考えてたらキリがないわ～」

チョコ「そうだゼ！　純粋に楽しめばいいのさ！　おっしゃ、大ジャーンプ！　うおっ！？」

ミコ「あの……天井の上に乗っかってしまいましたよ……？」

チョコ「そうだな……どうしよう……。下に戻れないかな……？」

カイコ「ふふっ。そのまま進んじゃいなさいな。そうすれば……」

チョコ「お……お～、なんか、土管があった！」

ミコ「土管の上に2、3、4って数字が書いてあります。

それぞれのステージへのワープですね」

チョコ「とすると……。よしっ、３の土管へＧＯ！」

ミコ「なぜ３なんです……？」

チョコ「フッフッフ、まあ見てろって！　３－１スタート！　そしてここで……」

ミコ「あっ、カメさんが……段差でマリオに踏み潰され続けてますよ！？」

チョコ「これが必殺、１００ＵＰだ！」

カイコ「説明しよう～！
１００ＵＰとは、文字どおりマリオを１００人以上に増やす技のことだ～！」

チョコ「そのまんまだな！
マリオって連続で敵を踏み潰すと得点がどんどん高くなっていって、
最終的には１ＵＰになるんだ。
そのあともずっと踏み続けられれば、永遠に１ＵＰし続けられるって寸法さ！」

ミコ「すごいですね～。ですが、マリオが１００人……。どういう仕組みに――」

カイコ「細かいことは言いっこなしだって言ったでしょ～？」

☆☆☆☆☆

ミコ「うわぁ。なんか、雰囲気違いますね、ここ」

チョコ「城の中だからな！」

カイコ「ふふっ。あっ、そのくるくる回転してるファイアーバー、気をつけてね」

チョコ「合点承知！　……あっ！」

ミコ「あらら……。ぶつかってしまいましたね。チビマリオに逆戻りです」

チョコ「くそぉ～！」

カイコ「でも、ミスにはならないから、頑張って進みましょう！」

チョコ「もちろんだゼ！」

――　そして　――

チョコ「うおっ！　炎が飛んできてるぞ！　むっ、ボス発見！」

カイコ「あれがかの有名な大魔王クッパよ～！」

ミコ「美味しそうな名前ですね」

カイコ「ふふっ、ラスボスはプルコギよ～」

ミコ「ええっ！？」

チョコ「嘘教えんなよ！」

ミコ「なんだ……残念です」

チョコ「残念なのかよ！」

カイコ「ふふっ。まぁ、今はクッパを倒しましょう」

チョコ「しかしこれ、どうすりゃいいんだ。
踏んづけても、こっちがやられちまいそうだよな……」

カイコ「あら、よくわかってるじゃないの。
ご褒美にヒントをあげるわね～！　右端のオノがヒントよ～！」

ミコ「ヒントどころじゃないですね」

チョコ「なるほどな。よっしゃ、ジャーンプ！」

カイコ・ミコ「おお～～～！」

（クッパ、炎の海に落ちていく）

ミコ「ボスなのに、あっけないですね」

チョコ「ま、そんなもんさ！　オレの手にかかれば、ちょちょいのちょい、ってな！」

☆☆☆☆☆

（その後も順調に進めていくチョコ）

チョコ「おっ！　海の上のステージだな！」

ミコ「イカがいますね」

カイコ「名前はゲッソーよ」

ミコ「すごいネーミングですね……。でも、どうしてイカが空を飛んでいるのでしょう？」

カイコ「もう、何度細かいことは気にしちゃダメって言わせるのよ～。

……そうだわ、今日のおやつはスルメにしましょう。

マヨネーズつけて食べましょうねぇ～！」

チョコ「オッサンぽいな。やっぱカイコ姉、年齢ごまかしてないか？」

カイコ「あら、チョコ。いらないの～？」

チョコ「……いるに決まってるだろ！　大好物だし！」

ミコ「チョコ姉様、人のことは言えないじゃないですか……」

☆☆☆☆☆

（そんなこんなで、ついに最終面）

チョコ「はぁ、はぁ……。ようやくループを抜けたぜ……」

カイコ「よく頑張ったわね。
自力で抜けられるとは思ってなかったわ～。チョコの頭で……」

チョコ「カイコ姉、ケンカ売ってんのか！？」

カイコ「ふふっ、冗談よ～」

ミコ「残るはラスボスだけですね！
気合い入れてやっつけちゃってください、チョコ姉様！」

チョコ「おうよ！」

（そしてラスボス登場！　しかし……）

ミコ「あの……これ……」

チョコ「うむ。ラスボスの大魔王クッパだ！」

ミコ「同じじゃないですか……」

カイコ「だけど、ハンマーも投げてくるし、結構大変よ？」

チョコ「フッ、このオレをなめてもらっちゃ困るゼ！　えいやっ！」

カイコ・ミコ「おお～～～～～！」

カイコ「一発で足の下をくぐり抜けるなんて……すごいわ～！」

チョコ「フフン、だてにアクション好きを豪語してるわけじゃないってことさ！」

☆☆☆☆☆

――　で、エンディング　――

チョコ「ピーチ姫！　助けに来たゼ！」

カイコ・ミコ「おめでとう（ございます）～」

（SE）パチパチパチ

チョコ「でも、解せんな……」

カイコ「あら、どうして～？」

チョコ「だってさ、カッコいい王子様ならいいけど、
こんなヒゲオヤジに助けられるってのも、ちょっと微妙だろ？」

ミコ「ま……まぁ……。
ですが、助けてくれたのですから、ピーチ姫だって素直に感謝するのでは？」

チョコ「でもよ、こういう場合、助けてくれた人と結婚するのがスジってもんだろ？
ピーチ姫がかわいそうだゼ！」

ミコ「確かに……そうですね……」

カイコ「そんなふうに言われてるマリオのほうが、かわいそうな気がするわ……」

ミコ「なんだかマリオが、無理矢理ピーチ姫に結婚を迫るひどい男に見えてきました」

カイコ「こ……これ以上マリオの印象を悪くしないうちに、終わりにしましょう！

スルメ、持ってくるわね～！」

チョコ「待ってました！　おやつターイム！」

ミコ「わーい！　ありがとうございます、カイコ姉様！」

（こうして3人は、楽しくお喋りしながらスルメを美味しくいただくのだった）

ミコ「このゲッソー、美味しいですね！」

チョコ「ゲッソー言うな！」

カイコ「ふふっ。それと、プルコギもあるわよ～！」

ミコ「ラスボス来ましたね！」

チョコ「違うっての！」

☆☆☆☆☆

……。

娘たち、3人とも、少々変わっている気がするな……。

いったい誰に似たんだか……。

……俺しかいないか。妻は超真面目人間だったからな……。

まぁ、ともかく。

今どきこんなレトロゲームをやらなくてもと思わなくもないが、楽しく遊んでくれているようで安心した。
これからもずっと、姉妹３人仲よくしながら成長していってくれればいいのだが。

さて……次はいったい、なんのゲームで遊ぶつもりなのか。
俺にとっても、楽しみになりそうだ。

☆☆☆☆☆

【ゲーム解説】

「スーパーマリオブラザーズ」

対応ハード：ファミコン　発売元：任天堂　発売日：１９８５年９月１３日

言わずと知れた、世界一売れたゲーム。全世界で４０００万本以上の売り上げを誇る。
その後もずっと続いているシリーズ。

あまりにも有名なため、とくに解説する必要もないと思うので、これくらいで……。

第1話　スーパーマリオブラザーズ（後書き）

こんな感じで書いていく予定です。

こういうのがアリなのか、食いついてくれる人がいるのか、それに、こんなネタで絵や画面写真もなくて楽しめるのか、よくわかりませんが……。

第2話　グラディウス

カイコ「それじゃあ、今回はコレ。グラディウスよ～！」

チョコ「また、ベタだな！」

ミコ「また、ベタですね」

カイコ「ベタでもいいのよ。さっさと始めなさいな。今回の担当はミコよ～」

ミコ「わかってます、カイコ姉様」

☆☆☆☆☆

ミコ「それでは、ゲームスタートです」

チョコ「敵は、バクテリアンっていうみたいだな」

カイコ「なんか……いや～な名前ね～」

ミコ「ですが、出てくる敵、全然バクテリアっぽくないですけど」

チョコ「ま、ここら辺はな。
先に進めば、ねちょねちょでぐちょぐちょのが襲いかかってくるゼ！」

ミコ「おおっ、それは楽しみです！」

カイコ「……楽しみなんだ……」

チョコ「ま……まぁ、ミコの趣味は置いておくとして。
ほら、パワーカプセルが出たぞ！　それを取ってパワーアップしていけ！」

ミコ「はい。カプセルを取るたびに光るゲージが移動して、
欲しいパワーアップのときにＡボタンを押せばいいんですよね」

カイコ「そうよ～。カプセルを取っるたびに毎回Ａボタンを押してたら、
凄まじくスピードアップしちゃうから注意してね～」

チョコ「それはそれで面白そうだな！」

ミコ「……嫌ですよ。クリアを目指すんですから」

カイコ「そうそう。ファミコンのグラディウスには、
アルキメンデスバージョンっていうのがあるのよ～」

ミコ「あ……あるきめんです……？」

カイコ「当時大塚食品から発売されていたカップ麺の名前よ。
カップ麺っていっても、お湯が不要で、あんをかけて食べる感じだったみたい。
食べたことなんてないけど」

チョコ「オレらが生まれる前の商品だし！　食べたことあったらおかしい！」

カイコ「2年くらいで製造中止になったみたいね～。
味が不評だったらしいから、ミコに食べさせたかったわ～」

ミコ「ちょ……！？　カイコ姉様、ひどいです！」

カイコ「ふふっ、冗談よ」

チョコ「いや、絶対本気だった」

カイコ「ふふふっ、ノーコメントで」

ミコ「……この家にいると、ミコはそのうち姉様たちから、
とてもひどい仕打ちを受けてしまいそうな予感がします……」

チョコ「姉様『たち』ってどういうことさ、『たち』って！？」

ミコ「……ノーコメントです」

カイコ「まぁまぁ。それで、そのアルキメンデスバージョンってのはね、
パワーカプセルがアルキメンデスの形になってるのよ」

チョコ「ほほう。それで？　取ったらなにか普通とは違った特典があったりとか？」

カイコ「ないわよ～。グラフィックが変わってるだけ」

ミコ「え？　それだけですか？」

カイコ「ええ。他には、エンディングのメッセージが変わっているみたいだけど、
　基本的にはそれだけの違いよ～」

チョコ「なんだか、解せんな……」

カイコ「まぁ、キャンペーンのプレゼントだったみたいだから、
　そんなもんじゃないかしら～？
　ゲームソフト1本もらえるって考えたら、結構なものじゃない？」

ミコ「ですが、せっかくですから、もっと変わっててほしかったですね」

カイコ「それはそうね～。
　プレミア価格で取引されてるし、そんな値段で買ったら泣けそう～」

☆☆☆☆☆

（などとお喋りしつつも、ゲームは進んでいく）

ミコ「オプション2つ目装備です」

チョコ「おっ！　やっぱオプションだよな、このゲームは！」

ミコ「オプション2つまでっていうのは、ちょっと寂しいですね」

カイコ「ゲームセンターとかにあったゲームだと、４つまでつくものね～」

チョコ「ま、ファミコンじゃ仕方がなかったってことだな！」

カイコ「そうそう。オプション1つで攻撃力倍増だものね～。２つあれば3倍よ～！」

チョコ「しかもオプション側は無敵ってのがいいよな！
単純に2倍の攻撃力ってだけじゃなくて、戦略性もあって！」

カイコ「チョコは頭使うの苦手なくせに～」

チョコ「ぐっ……！
カイコ姉だって、トロいからシューティングなんてできないくせに……！」

カイコ「トロいんじゃなくて、おしとやかなのよ」

ミコ「……とすると、ミコは暴れん坊な子ってことになるんですか？」

カイコ「ミコは元気いっぱいな子ってことよ～！」

ミコ「……それならいいです」

チョコ「単純な子でもあるな」（ぼそっ）

カイコ「そんな元気いっぱいなミコに朗報～！」

ミコ「えっ？」

カイコ「スタートボタンで画面を止めて、２コンのマイクで『おっぷしょん！』って
　　大声で叫べば、なんとオプションが６つになるのよ！」

ミコ「ええっ！？　ほんとですか！？」

チョコ「……」

カイコ「ふふっ、やってみなさいな」

ミコ「はい！　……おっぷしょん！　……カイコ姉様、変わりませんよ？」

カイコ「タイミングが重要なのよ～！　もっと魂を込めて～！」

ミコ「わかりました！　おっぷしょん！」

カイコ「もっと大きく！」

ミコ「おっぷしょん！！」

カイコ「もっと激しく！」

ミコ「おっぷしょん！！！」

カイコ「もっといやらしく！」

ミコ「いやら……？　お……おっぷしょぉ～ん（ハート）」

チョコ「カイコ姉、それ、ウソだろ……？」

カイコ「もちろんよ♪　あぁ～ん、楽しかったわ～」

ミコ「ちょ……！？　カイコ姉様～！」

カイコ「ふふっ、ミコは素直でいい子ね～」

（ミコの頭を撫で撫で）

ミコ「……ま、まぁ、いいですけど……」

チョコ「やっぱ、単純な子だな」（ぼそっ）

☆☆☆☆☆

（順調に進み、ステージ３へ）

チョコ「おっ、３面だな！」

カイコ「ふふっ、あのステージね」

ミコ「……出ました、モアイ像です！」

チョコ「しかも……」

ミコ「わわっ、なにやら輪っかを吐き出してきましたよ！」

カイコ「イオンリングよ～」

ミコ「父様が昔、タバコで作ってくれた輪っかと同じでしょうか」

チョコ「同じわけあるか！　イオンリングを吐く父親がどこにいる！？」

ミコ「冗談だったのに……」

カイコ「ふふっ。あ、そうそう。
　ミコ、モアイ像はイースター島にあるってのは、知ってるわよね？」

ミコ「はい、知ってます」

カイコ「だったら、実際にイオンリングを吐くってのも、知ってるわよね？」

ミコ「えっ？　そうなんですか！？」

カイコ「そうよ～。イースター島っていうのはね、当時、文明の中心だったの。
　宇宙人からの侵略から町を守るため、モアイ像は作られた

のよ」

ミコ「そ、そうなんですか！？　それに、宇宙人からの侵略……！？」

チョコ「そうそう。当時は激しかったらしいな～」

カイコ「ええ。今でこそ随分と落ち着いたけど、それでもまだ安全とは言えないのよ～」

ミコ「えええっ！？」

カイコ「ちょっと考えてみなさいな。
　モアイ像……なにか似た響きのもの、思いつかない？」

ミコ「……あっ、もしかして、モヤイ像ですか！？」

カイコ「当たり～！　渋谷駅にあるのが有名だけど、
　伊豆諸島の新島にあるのが日本では元になっているわね～」

チョコ「蒲田駅にもあるんだよな！」

カイコ「そしてもちろん、宇宙人の侵略に対抗するために作られた像なのよ～」

ミコ「し……知りませんでした。
　ですが、渋谷のモヤイ像って、待ち合わせ場所にもなってますよね？
　人がたくさん集まる場所にあるなんて、危険じゃないんですか！？」

カイコ「ふふっ。モヤイ像が狙っているのはね、実は人間のほうなのよ～」

ミコ「えっ！？」

カイコ「今どきの宇宙人ってね、巧妙に地球人に成りすまして紛れ込むものなの。
　だからそれを見抜いて、イオンリングで撃ち抜くのが目的なの。
　あっ、でも、人体には影響ないから安心していいわよ～」

ミコ「イオンリングで撃ち抜かれた宇宙人は、どうなるんですか！？」

チョコ「モヤイ像に食われる」

ミコ「た……食べるんですか！？」

チョコ「ひと口でペロリだゼ！」

ミコ「恐ろしいです、モヤイ像……」

カイコ「たまに神隠しみたいに人がいなくなるのは、モヤイ像が地球人を誤認して、
　食べてしまったから、とも言われてるわね～。
　ミコも外出するときには、宇宙人に間違われないように注意してね～」

ミコ「ど……どう注意すればいいんですか！？」

チョコ「ぷっ……あっははは！　ミコ、素直すぎ！」

カイコ「ちょっと、チョコ！　ふふふふっ！」

ミコ「あ～～っ！　騙しましたね！？」

カイコ「ごめんなさいね～。大丈夫よ、日本の技術力はすごいんだから。
誤認で食べられたりなんてしないわ～」

ミコ「……イオンリングは否定しないんですね……」

☆☆☆☆☆

（そんなバカ話をしながらも、ステージ３はクリア）

ミコ「あれ？　なんですかコレ！？　モアイがくるくる回転してますよ！？」

チョコ「おっ、ワープしたな！」

カイコ「ステージ４を飛ばして、ステージ５へ突入ね～」

チョコ「もったいないな！　ステージ４のＢＧＭがいいのに！」

ミコ「むう。そう聞くと、なんだかとっても残念になってきます」

チョコ「だったらモアイにぶつかればＯＫ！　死んでステージ４が始まるゼ！」

ミコ「それはさすがに嫌です」

チョコ「ちっ！」

カイコ「無事、ステージ５に来たわね～」

チョコ「触手ステージだな！」

ミコ「ようやく、バクテリアンって名前に相応しい敵が出てきましたね」

カイコ「まぁ、ここは、それしか出ないけど」

ミコ「むう。ある意味潔いとは思いますが……。
　ただ、いまいちグロテスク感が足りませんね……残念です」

カイコ「ミコはなにを期待してるのよ……」

チョコ「ま、さくさく進めろ！」

ミコ「合点承知です！」

（順調にステージ６へ）

ミコ「アメーバです！　いいですね、単細胞生物！」

チョコ「いや、戦闘機と同じくらいの大きさなんだから、
単細胞生物ってことはないんじゃないか？」

ミコ「ですが、やっぱりグロテスク感が足りません」

カイコ「ファミコンのグラフィックス性能でそこまで求めちゃダメよ～」

チョコ「それ以前に、グロテスク感を求める小学生ってのが、オレとしては嫌だぜ……」

☆☆☆☆☆

ミコ「あっ、なんだか要塞みたいなところに入っていきますね」

カイコ「最終面よ～。ミコ、頑張って～」

ミコ「バクテリアンっぽさが、またなくなりました。残念すぎます」

チョコ「グロフェチ発言はもういいから。さくっとクリアしちゃえよ！」

ミコ「わかってます！　……あっ、シャッターが閉まっていきます！」

カイコ「閉じる前に通り抜けてね～」

ミコ「もちろんです！　……さて、いよいよラスボスですね！　わくわくします！」

チョコ「期待に添った見た目と言えるかもだな」

ミコ「おおっ！　脳みそです！　じゅるり」

チョコ「なぜヨダレを拭く！？　ミコって、やっぱ変わってるな……」

ミコ「姉様方には負けます」

カイコ「私まで巻き込まれたわ～。まぁ、それはいいとして……ラスボスだけど」

ミコ「あれ？　なんか画面が変わりました」

カイコ「おめでと～！　クリアよ～！」

ミコ「はい？　ラスボス、戦ってませんよ？」

チョコ「あの脳みそ、攻撃もしてこないけど、時間が経てばクリアになるんだ！」

ミコ「う～～～。なんだか不完全燃焼です～」

カイコ「ふふっ、そんなミコに朗報よ～！」

ミコ「……悪い予感しかしませんが……」

チョコ「エンディングの最後に、なんか、アルファベットが1文字表示されたな」

カイコ「ええ。それ、1周クリアごとに違う文字になっていて、6周目まで見ると、ある単語になるのよ！……というわけで、ミコ、頑張って6周クリアしてね！」

ミコ「マジですか！？」

カイコ「マジよ～。2周目は1周目と比べると難しくなってるから、不完全燃焼は解消されるはずよ～、よかったわね～」

チョコ「6周目にまで進むと、すごく難しくなりそうだな！」

カイコ「……いいえ、3周目以降は2周目と変わらないわ～」

ミコ「え……そうなんですか？　だったらせめて2周目までで――」

カイコ「6周クリアがノルマよ！　終わるまで夕飯食べさせないからね～」

ミコ「お……鬼がいます……」

チョコ「ははは、ま、頑張れ、ミコ！」

カイコ「もちろん、チョコも食べられないからね？」

チョコ「鬼ババ～！」

カイコ「……死にたい？」

チョコ「いえ……」

カイコ「それじゃあ、夕飯の準備してくるわね～。
あっ、ちゃんとクリア画面を確認しに来るから、ズルは無しね♪」

ミコ・チョコ「悪魔（です）……」

☆☆☆☆☆

……。

カイコは少々、Ｓっ気があるみたいだな。
おとなしそうな顔をしているというのに……。

だが、料理をしている姿は可愛らしいと言えるのかもしれない。
笑みを浮かべているのは、妹たちが喜ぶ姿を思い描いているからかな？

……あの煮物、ジャガイモをモアイ像っぽくカットしてあるな。
一緒に煮ているのは、イカリング……？

なるほど、ミコをからかうネタにしようって魂胆なわけか。

ま、それはそれで、姉妹のいいコミュニケーションになるだろう。
どうせ俺には、なにも言う資格はない……いや、なにも言うことはできないのだが。
ただ、できれば、ひと言だけ。
「ミコ、頑張れ」と言ってやりたいな……。

☆☆☆☆☆

【ゲーム解説】

「グラディウス」

対応ハード：ファミコン　発売元：コナミ　発売日：１９８６年４月２５日

これも解説の必要はないでしょうけど。その後、ずっと続いているシリーズ。

ファミコン版は、１９８５年に登場したアーケード版からの移植。
ハード性能的に完全移植はできず、オプションが２つまで、レーザーが短いなど、様々な違いがある。
また、ボーナス５０００点、１ＵＰといった隠し要素、ワープ、上上下下左右左右ＢＡのコナミコマンドなど、
追加要素も多数用意されている。

第3話　たけしの挑戦状

チョコ「というわけで、今回はたけしの挑戦状だ！」

カイコ「ちょちょちょ、ちょっと待って！　ほんとに、それなの？」

チョコ「もちろん！」

カイコ「今回って、私の担当よね？
　これ、アドベンチャーゲームなの？　アクションゲームじゃあ……」

ミコ「アクションアドベンチャーゲームですから、カイコ姉様の担当で間違いないです」

チョコ「そういうことだ。観念しな！」

カイコ「うううう……だけど、いろいろ噂くらいは知ってるのよ？
　1時間待たないとダメな部分があるとか……」

チョコ「ま、そこは別の方法もあるみたいだけどな！
　もっとも、苦労するとは思うけど。ひっひっひ！」

ミコ「チョコ姉様が悪魔のようです。
　普段の仕返しをしようとほくそえんでます」

カイコ「やっぱり、そういうことなのね……」

チョコ「いやいや、せっかく父さんが遺してくれたゲームなんだぞ？

ちゃんと遊んでやらなきゃ、バチが当たるってもんだろ！」

カイコ「でも、おそらくお父さんも、こんなゲームクリアしてないと思うわ……」

チョコ「こんなゲームって言うな！　世界の北野に怒られるぞ！」

カイコ「きっと、怒らない気がする……。
それにこのゲーム、クソゲーの代表とも言われてるわよね……」

ミコ「カイコ姉様、往生際が悪いです。早く始めましょう！」

カイコ「うううう、わかったわよぉ～。
ふたりには、ベタなゲームを指定したのに、どうして私だけ……」

チョコ「これもある意味ベタだろ！　８０万本くらい売れたらしいし！」

ミコ「８０万本も売れたクソゲー……。なんだか、すさまじいですね」

☆☆☆☆☆

ミコ「それでは、ゲームスタートですね」

カイコ「会社みたいね」

チョコ「うだつの上がらないサラリーマンが主人公らしい」
カイコ「そんな主人公、嫌だわ……」
チョコ「左が社長室みたいだぞ」
カイコ「ふむ……。あっ、ボーナスをもらえたわ～！」
ミコ「今どき現金手渡しなんて、珍しいですね」
チョコ「今どきのゲームじゃないしな、これ」
ミコ「そうでした」
カイコ「社長さん、ありがとう……あっ！」
チョコ「うわっ！　カイコ姉、ひどっ！　社長を殴ったぞ！」
ミコ「ボーナスのお礼は、こぶしですか……」
カイコ「そ……そんなつもりはなかったのよ～？
　ただ、ボタンを間違えて押しちゃただけで～……」
チョコ「ま、せっかくだし、殴り殺しとけ！
　このゲームならできるし！」
カイコ「ひ……ひどいゲームね……。そこまで悪女じゃないわ、私」
ミコ「すでに一発殴ったあとですから、あまり説得力はありません

けどね」

カイコ「うるさいわね。とにかく、会社の外に出るわ」

チョコ「頑張れ、カイコ姉！」

カイコ「……きゃっ、いきなりヤクザに殴られたんだけど～！？」

ミコ「恐ろしい町ですね」

カイコ「えっ？　今度は警官まで殴ってきたわよ～！？」

ミコ「どうやら、警官じゃなくてガードマンらしいですけどね」

チョコ「ふっふっふ、世の中の厳しさを思い知れ！」

カイコ「こんな世の中、ありえないわ……」

ミコ「カイコ姉様、そんなにのんびりしてると……」

カイコ「ああ～、殴り殺された……？」

チョコ「へっへっへ、ゲームオーバーだな！」

ミコ「葬式が始まりました……」

カイコ「悲しい結末ね……。じゃあ、今回はこれで終わ――」

チョコ「終わらね～よ！　しっかりクリアするまでやるんだ！」

カイコ「えええ～～～～！？」

チョコ「くっくっく、血反吐を吐いても終わらないからな！　覚悟しとけ！」

ミコ「チョコ姉様が極悪人です……」

☆☆☆☆☆

（カイコ、どうにか頑張って進めようとするも、まったくわからず）

カイコ「うううう……」

ミコ「何度目の葬式でしょうか……」

カイコ「こんなの無理……どうすればいいのか、わからないわ……」

チョコ「いっひっひ、カイコ姉が涙目になってるなんて、珍しいよな！」

カイコ「む～……」（いらいらいら）

ミコ「……さすがにちょっと、かわいそうな気がしてきました……」

チョコ「確かに、これ以上やると、イライラで大爆発しそうだよな。そんなカイコ姉の姿も見てみたいけど……」

ミコ「ですが、確実にミコたちにも被害が及びますよ」

カイコ「がるるるるる……」

チョコ「うなり始めた！　限界が近いか！　……仕方がない！
カイコ姉！　オレが攻略サイトを見ながらナビするから！
だからファミコンを破壊するなよ！」

カイコ「そ……そんなことしないわよ～！　でも、ナビはお願い……」

チョコ「お願いしますだろ？」

カイコ「お……お願いします……」

チョコ「く～っ！　気分いいな！」

ミコ「……チョコ姉様、調子に乗ってると今度逆襲されますよ？」

☆☆☆☆☆

チョコ「とりあえずな、このゲーム、死んでも大丈夫だ」

カイコ「えっ？」

チョコ「死んで手足をバタバタしてるあいだに、
Ｂボタンを押しながらＡボタンを３回押すとその場で復活

するんだ」

カイコ「な……なによそれ！？」

チョコ「しかも体力も満タンで復活だ」

ミコ「……ゲームバランスもなにも、あったもんじゃないですね……」

チョコ「それと、セレクトボタンでメニューを開いて戻ると敵が消えるってのもある。
これを使えば、殴られずに進むことができるぞ」

ミコ「……それもまた、ゲームバランス崩壊な感じですね……」

チョコ「バランスだとか、そんなことを考えちゃいけないんだよ！」

カイコ「やっぱり、すさまじいゲームね～」

チョコ「あとは、セレクトメニューの『おわる』でパスワードが見れる。
それをメモっておけば、途中から再開可能だ。
座標まで残るわけじゃないから、そんなにこまめにメモする必要はないけどな」

ミコ「パスワード……。セーブ機能はないんですね……」

カイコ「この頃のゲームだと、それが普通だったみただけどね」

（ともかく、チョコのナビに従いゲームを進めるカイコ）

チョコ「社長にボーナスをもらうだけじゃなくて、辞表を提出して退職金ももらうんだ」

カイコ「ボーナスをもらってすぐに辞めるのね……。なんだか、ひどい社員だわ」

チョコ「当然の権利だろ！」

ミコ「ついでに、植木の中のへそくりも持っていきましょう」

カイコ「……窃盗になるんじゃないかしら……」

チョコ「気にしない気にしない！　さあ、次は、カルチャークラブで技能習得だ！」

ミコ「ひんたぼ語、ハンググライダー、三味線の３つですね」

カイコ「ひんたぼ語……。そんな変な言語を覚えなきゃならないのね……」

チョコ「それじゃあ、ここから先は、ひんたぼ語で会話してみよう！　カイコ姉、どうぞ！」

カイコ「ええっ！？　え～っと……。
　ひんたぼうんたぼ……って、喋れるわけないでしょ～！」

チョコ「一瞬カイコ姉が壊れたみたいだったゼ！　面白かった！」

ミコ「今日のチョコ姉様は、とっても活き活きとしてますね」
チョコ「次は、トラベル玉川で南太平洋行きのチケットを買うぞ！」
カイコ「……もう、ストーリー展開とか完全無視って感じなのね」
ミコ「攻略することが前提のやり方っぽいですからね、そんなもんでしょう」

☆☆☆☆☆

チョコ「次はパチンコ屋だ！」
ミコ「まだ１８歳になってませんから、ダメですよ」
カイコ「主人公はサラリーマンだから問題なしよ～」
チョコ「そうそう。カイコ姉はおばさんだから問題なしだ！」
カイコ「ちょっと！？　私じゃなくて、主人公よ～！」
ミコ「玉を１００発買いましょう」
カイコ「一番安い１００発でいいのね？　じゃあ、パチンコスタート～！
……なによ、全然入らないじゃない……」

チョコ「下手くそだな！　まぁ、それでいいんだけど」

カイコ「む～。玉がなくなっちゃう」

ミコ「そこでコレの出番です！」

カイコ「2コン？」

チョコ「そうだ。玉が0になったら、2コンのマイクで叫ぶんだ！
玉が出ね～ぞ、こら～！　ってな！」

カイコ「あのねぇ……」

ミコ「いえ、カイコ姉様、これは本当です。攻略サイトにも書いてあります」

カイコ「ええっ！？」

チョコ「ほら、玉がなくなるぞ！　カイコ姉、でっかい声ではっきりと叫べよ！」

カイコ「う……、わかったわよ。ふぅ～……。
た……玉が出ね～ぞ、こら～！」

ミコ「おお～！　カイコ姉様らしからぬセリフです！」

チョコ「結構燃えるシチュエーションだな！」

カイコ「変なことに燃えないで……」

チョコ「のんびりしてる暇はないぞ！　ヤクザが出てきてる！
　さくっと殴り倒してしまえ、暴れん坊カイコ！」

カイコ「誰が暴れん坊よ！　……えいえいえい、倒したわ～！」

ミコ「さすがカイコ姉様です」

カイコ「ミコも密かに、私を陥れて楽しんでる感じよね……」

ミコ「い……いえ、そんな、めっそうもございません……」

カイコ「どうして目を逸らしてるのかしら～？」

チョコ「まぁまぁ。
　とりあえず、玉を５０００発ゲットしたから、それを三味線に交換だ」

カイコ「ヤクザからパチンコ玉を巻き上げるなんて……。
　この主人公、ほんとに、うだつの上がらないサラリーマンなの～？」

ミコ「カイコ姉様、細かいことを気にしてはいけません。
　スーパーマリオのときに、さんざん言われましたよ？」

カイコ「そ……そうだったわね……」

☆☆☆☆☆

チョコ「さて、次はカラオケスナックあぜ道だな！
　とりあえずお酒を2杯飲んで3杯目を断ると、カラオケタイムだぜ！」

カイコ「なんだか、嫌な予感……」

ミコ「……」

（ミコは無言で、2コンをカイコに手渡す）

チョコ「さあ、歌え！」

カイコ「やっぱり～！」

チョコ「選べるのは4曲しかないけどな。
　元気よく、はっきりと、大声で歌うんだぞ！」

ミコ「3回連続で、上手いと褒められないといけないんですよね」

チョコ「演歌を選んだな！　雨の新開地、歌うは我が家の長女、カイコ～！」

ミコ「よっ、待ってました！」（パチパチパチ～！）

カイコ「ちょ……ちょっと、そういうのやめてよ～」

チョコ「ほら、始まるぞ！」

カイコ「あ……あ～なた～のた～めな～ら……」

（恥ずかしがりながらも歌いきるカイコ。でも――）

チョコ「下手くそ！　だってさ！」

ミコ「1度でも下手くそ判定になったら、お酒を飲むところからやり直しだそうです」

カイコ「むむ……面倒なのね……」

（再びカラオケに挑戦するカイコ。だけどやっぱり――）

チョコ「下手くそ！　もっと大声でしっかり歌え！」

ミコ「カイコ姉様、他の歌もありますよ？　はとぽっぽとか……」

チョコ「おっ、そっちのほうがバカっぽい！　じゃなくて……」

カイコ「本音がだだ漏れね……」

チョコ「ともかく歌え！　カイコ姉、はとぽっぽだ！」

カイコ「わかったわよ～。ぽっぽっぽ～、はとぽっぽ～……」

（何度も何度も挑戦。だけど、どうしても成功せず）

カイコ「うううう……」

ミコ「またしても、カイコ姉様が涙目に」

チョコ「やっぱ気分いいな！　ま、これくらいで許してやるか！」

カイコ「え……？」

チョコ「ここ、２コンのマイクで歌わなくても大丈夫な方法があるんだよ」

カイコ「さ……先に言いなさいよ〜！」

ミコ「まぁまぁ、カイコ姉様。チョコ姉様の首を絞めないでください」

チョコ「ごほごほっ！　マジで首を絞めてくるとは、カイコ姉、ひどいぜ……。

ともかく、２コンの下＋Ａボタンでマイクの代用もできるんだ。

それで、歌い始めから押しっぱなしにして、最後にウィンドウが消える瞬間、

ボタンを離すようにすると、結構楽にクリアできるみたいだぜ！」

カイコ「知ってて教えないチョコのほうが、よっぽどひどいわ……。

ああ……私、何度も大声で歌っちゃった……。

ご近所に聞こえたりしてないかしら……」

チョコ「バッチリ聞こえてたと思うゼ！」

カイコ「ううう……」

（ともかく、どうにかカラオケをクリア）

ミコ「あっ、ヤクザが出てきました」

カイコ「またなのね～」

チョコ「さくっと倒しちゃえ、カイコ姉」

カイコ「はいはい」

ミコ「殴り倒すことにも慣れてきましたね、カイコ姉様。さすがです」

カイコ「もう、ミコったら、またそんなことを～。……ヤクザ退治終了っと」

チョコ「完全に慣れてるじゃん。ほら、じいさんが出てきたぞ」

ミコ「殴り倒すんですね！」

カイコ「あなたたちは、また、そういうことを……。
殴ったりなんて、しないわよ～。私はおしとやかな淑女な

んですから」

チョコ「……」（ニヤリ）

カイコ「……？」

チョコ「まぁ、とりあえず、ホステスが邪魔だから倒そう」

カイコ「ちょ……ちょっと、それはひどいでしょ！」

ミコ「いえ、倒さないとじいさんが話しかけてくれないみたいです」

カイコ「えええ～？　そうなの～？　……仕方ないわね……」

チョコ「容赦なくホステスを殴り倒すカイコ姉！」

カイコ「私じゃなくて主人公が勝手にやっただけよ～」

ミコ「……じいさん、白い紙を渡してくれましたね」

カイコ「あっ、これ知ってるわ。1時間待つとかいう……」

チョコ「大丈夫。水に浸けるを選べば、5分待ちでOKだ」

カイコ「それでも5分は待つのね……」

――　で、5分後　――

チョコ「ここで歌うと、地図が浮かび上がるんだ！
さあ、カイコ姉、マイクに向かって歌うんだ！」

カイコ「歌わないわよ！　……2コンの下＋A……っと」

ミコ「む～、つまらないです、カイコ姉様」

カイコ「ふん。ゲームが進めばいいのよ～！
これ以上恥ずかしい思いなんてしたくないわ！」

チョコ「ま、歌う必要もなかったんだけどな。
マイクでなにか喋るだけで大丈夫だったし」

カイコ「チョコ……」

ミコ「ほら、カイコ姉様！　無事、地図をゲットしましたよ！」

チョコ「よし！　それじゃ、じいさんを殴り倒そう！」

カイコ「だから～！　そんなことしないって、さっきも言ったでしょ～？」

チョコ「いいのか？」

カイコ「え……？」

チョコ「倒さないとクリアできないぞ？」

カイコ「えええ～っ！？」

ミコ「カイコ姉様、残酷なようですが、これが現実というものです……」

カイコ「ちょ……、ほんとに？」

（こくん。黙って頷くふたり）

カイコ「……うう、ごめんなさい、おじいさん……」

チョコ「カイコ姉がじいさんを殴り倒した！」

ミコ「カイコ姉様、人でなしです……」

カイコ「……ほんとにクリアに必要なの～！？　騙してない～！？」

チョコ「くっくっく、さて、どうかな～？」

カイコ「もう～！」

☆☆☆☆☆

チョコ「それじゃあ、カイコ姉。次は酒を飲んで酔っ払って潰れてくれ」

カイコ「な……なによそれ～！？」

ミコ「いえ、それも必要なんですよ」

カイコ「む～……。ぱたり」

チョコ「カイコ姉が酒飲んで暴れて潰れた～！」

カイコ「暴れてない～！　だいたい、私じゃなくて主人公だってば～」

ミコ「でも、奥さんが怒ってますよ！」

カイコ「結婚してたのね、この人……」

チョコ「奥さん、殴ってきてるけどな！」

カイコ「ちょっと！　また殴り倒すの？　……あっ、なにか選択肢が……」

ミコ「ここで、離婚するわけですね」

カイコ「離婚しちゃうのね……。なんだか、悲しい……」

チョコ「いやいや、酒飲んで潰れたからって殴りかかってくる嫁なんて、
離婚されて当然だろ！」

ミコ「ミコには、どっちもどっちに思えます……」

チョコ「とりあえず、慰謝料を取られて所持金が半分になったから、
銀行で預金を下ろそう。５万しかないけどな」

カイコ「もっと貯めておきなさいよね……」

チョコ「そして、日本を出る！」

カイコ「国外逃亡～！？」

ミコ「カイコ姉様、違いますよ。
　宝の地図をゲットしたわけですから、宝探しの旅に出かけるんです！」

チョコ「もっとも、この先も困難の連続だけどな！」

カイコ「……もっと平穏な人生を送りたいわ……」

☆☆☆☆☆

（飛行機で日本を飛び立ち、ひたんぼ島に到着）

カイコ「あっ、服装が変わってるわ～」

チョコ「南の島だからな！」

ミコ「……現地の人も殴ってくるんですね」

カイコ「旅先も危険がいっぱいってことね～」

チョコ「ここでやることは、銀行で両替して、
土産物屋で刺繍、装備屋で水筒と銃を買うことだな」

ミコ「そしてリゾートセンターからハンググライダーで飛び立ちます」

カイコ「攻略サイトのナビありだと、言われたとおり進めるだけね〜」

チョコ「おっ、それじゃあ、ここからは自力でやってみるか？

カイコ「……嫌よ。きっとこの先も、不条理なクリア法とかなんでしょ〜？」

ミコ「バレてますね」

チョコ「ま、そういうゲームだってことだな！」

（そしてハンググライダーステージへ）

カイコ「敵が出てきて、弾も撃てて、シューティングゲームみたいね〜」

チョコ「ま、ハンググライダーだから上に移動できないけどな！」

カイコ「あら、ほんと……。一気に難易度上がった感じがするわ〜」

ミコ「風に乗ると、少し上昇できますけどね」

（案の定というかなんというか、全然クリアできないカイコ）

カイコ「うううう……。こういうのはミコの得意分野なのに～」

チョコ「カイコ姉は、反射神経鈍すぎだからな！」

ミコ「頑張ってください、カイコ姉様！」

カイコ「……代わってくれたりは、しないのね……」

チョコ「そりゃあ、今回の担当はカイコ姉だからな！　くっくっく！」

カイコ「……次回、覚えてなさいよ、チョコ……！」

ミコ「まぁまぁ、カイコ姉様。
　ケンカをするためにレトロゲームをしてるわけじゃないんですから。
　天国にいる父様だって、楽しく遊ぶミコたちの姿を見たいはずです」

カイコ「……そうね。ミコは、やっぱりいい子ね～」

ミコ「代わったりはしませんけどね」

カイコ「やっぱり悪い子ね……」

ミコ「カイコ姉様、ひどいです」

☆☆☆☆☆

（苦労はしたものの、ハンググライダーをどうにかクリア）

カイコ「ようやくクリアできた……」

チョコ「まぁ、まだ先は結構長いけどな！」

ミコ「頑張ってください、カイコ姉様！」

カイコ「そろそろ気力も限界に近いけど……」

チョコ「ま、さっさと進めよう。ここはチョバリン島だな！」

ミコ「ほこらに入って出ると、ワープしてるみたいですね」

カイコ「敵もたくさん出てくるけど、復活できるし問題なしね。
やっぱり、このゲームって普通じゃないわ……」

チョコ「ここはしっかりナビしてやるかな。
ジャングルを抜けると、民家がある。一番最初の民家に入ること」

カイコ「……間違うとどうなるの？」

チョコ「出られなくなる」

カイコ「不条理だわ……」

ミコ「おや？　なにやら、捕まってしまいましたよ？」

カイコ「えっ？　ここもハズレ？」

チョコ「いやいや。芸をすれば抜けられる。
三味線を持ってて、しかもちゃんと習得しててよかったな！」

カイコ「ほんと、不条理な展開だわ……」

チョコ「さあ、カイコ姉！　芸ってことは、三味線を弾きながら歌うんだ！」

カイコ「えっ？」

（ミコ、無言で2コンを手渡す）

カイコ「わかったわよ～。……なにを歌えばいいの～？」

チョコ「はとぽっぽで、いいんじゃね？」

ミコ「そうですね。頑張ってください～！」

カイコ「うううう……。ぽっぽっぽ～、はとぽっぽ～……」

チョコ「ふう。堪能した！」

ミコ「もちろん、マイクで歌う必要なんてなかったわけですが」

カイコ「途中で気づいたわ～。下＋Ａでよかったのよね～」

ミコ「いえ、それすら不要だったんですが」

チョコ「うむ！　面白い余興であった！」

カイコ「ちょ……チョコ～！？」

ミコ「まぁまぁ、カイコ姉様。まだゲームは続いてますから」

☆☆☆☆☆

カイコ「山の上にほこらがあるわね～。でも、ジャンプしても登れないわ」

チョコ「しゃがんだ状態でジャンプすると、大ジャンプできるゼ！」

カイコ「……あら、ほんと。知らなかったわ～。ここまで全然必要なかったものね……」

ミコ「このためだけにある仕様って感じですね」

チョコ「ほこらの仙人には、水筒をプレゼントだ！」

カイコ「なぜに水筒……」

ミコ「そしてまた、最初の民家に戻って、今度は刺繍をプレゼントです」

チョコ「お礼に聖なる石をもらえるぞ！」

カイコ「不条理よね……。どれが当たりだとか、ヒントってあるの～？」

ミコ「なさそうですよね……」

（ともかく、一番高い山へ）

チョコ「まず、あの山の頂上へ登るんだ！」

カイコ「大ジャンプね。……1回じゃ無理だわ。でも……」

ミコ「カイコ姉様、さすがに、このゲームの世界に慣れてきてますね」

カイコ「あまり染まりたくはない世界だけど～」

チョコ「で、攻略の続きだけど、頂上でウンコするんだとさ」

ミコ「ほほう」

チョコ「というわけで、カイコ姉、今ここで実際にウンコを――」

カイコ「しないわよ！　まったく……。きっとこうでしょ、座るだけとか。……ほら」

ミコ「やっぱりカイコ姉様、この世界に染まってます」

カイコ「嫌～、染まりたくない～！」

☆☆☆☆☆

（というわけで、洞窟内部へ潜入）

チョコ「ここから地下４回まで降りていくんだ。下への道は、またウンコだけどな！

カイコ姉、ここでも実際にウンコを――」

カイコ「しないって言ってるでしょ～？

だいたい、仮にも女の子なんだから、そんな汚いこと言わないの～」

チョコ「仮にもってなんだよ……」

ミコ「それはともかく、マップは結構広いですよ？」

チョコ「カイコ姉、教えてほしかったら、せめてウンコ座りでお願いしろ！」

カイコ「どうしてウンコ座りなのよ～？」

ミコ「……カイコ姉様も、汚いことを口にしましたよ？」

カイコ「う……。ふん、いいわよ、自力で座る場所を見つけるから～」

（数分後――）

カイコ「……チョコ……、お……お願いします……」

チョコ「ふむ！　ほんとにウンコ座りまでするとは！」

カイコ「チョコがやれって言ったんじゃない……」

ミコ「またカイコ姉様が涙目です。次回の仕返しが怖いですね、チョコ姉様」

チョコ「カイコ姉が勝手にやっただけだし。オレは冗談で言っただけだったのにさ！」

カイコ「ひどい……」

（ともかく、どうにか地下４回までたどり着く）

カイコ「合計3回も、ウンコ座りでお願いする羽目になるなんて～……」

ミコ「カイコ姉様の勇姿、ミコの目にしっかりと焼きつけました！」

カイコ「焼きつけないで……」

チョコ「こっちは写メも撮ったけどな！」

カイコ「ううう……」

チョコ「……おや？　制服のスカートのまま深く腰を落としてるせいで、

完全にパンツまで見えてるな、この写真！」

カイコ「ちょ……ちょっと～！　さすがにそれは消してよ～！」

チョコ「いい脅しアイテムをゲットできたゼ！

さて、ゲームを進めよう、カイコ姉！　もうちょっとで終わりだ！」

カイコ「うぐぐぐ……。わかったわよ～……」

（そして財宝とご対面）

カイコ「ようやく……ようやくクリアなのね～……！」

チョコ「ちなみに、じいさんを倒してないと、ここで財宝を横取り

されてジ・エンド」

カイコ「ひどい！　でも、倒さないとダメっていうのは、ほんとのことだったのね～」

ミコ「カイコ姉様、ミコたちを信用してなかったんですか？　ひどいです……」

カイコ「さんざん人をもてあそんでおいて、なにを言うのかしらね～」

チョコ「で、エンディングだけど……」

ミコ「この顔は、たけしさんですね」

カイコ「えらいっ！　……って、なによ、これだけ！？」

チョコ「慌てるな。５分待つと真のエンディングがあるゼ！」

カイコ「……もう、嫌だわ、このゲーム……」

――　５分後　――

ミコ「あっ、新たにメッセージが出ました」

カイコ「え～っと……。

『こんなゲームに、マジになっちゃって、どうするの』……？」

チョコ「これで本当に終わりだ！」

カイコ「ひどいわ～！」

ミコ「それに、スタッフロールなんかも無いんですね」

チョコ「これぞ世界の北野クオリティ！」

カイコ「そう言っちゃうのは、いろいろと問題がある気がするけど……」

ミコ「とにかく、カイコ姉様、クリアおめでとうございます！」

カイコ「なんだか、素直に喜べない結末だったわね～……」

チョコ「いっひっひ！　今日はたっぷり楽しませてもらったゼ！」

カイコ「あら、楽しみはまだ終わってないわよ～？」

チョコ・ミコ「え？」

カイコ「今日の夕飯で、た～っぷり仕返しさせてもらうから、覚悟しといてね～？」

ミコ「ちょ……、カイコ姉様、ミコもですか？」

カイコ「ふふっ、当たり前よ～！

ふたりの嫌いな食材、目いっぱい使っちゃうからね～♪」

チョコ・ミコ「そ……そんなぁ……」

☆☆☆☆☆

料理を作るのがカイコの役目になっているのだから、
こういった仕返しが来るのは目に見えていたと思うのだが。
チョコもミコも、まだまだ子供ということか。

だが、なんといか……。
よくあのゲームをクリアしたものだな。
今はネットで攻略法も簡単に見られるから、楽な世の中なのかもしれないが。

俺があのゲームを買った頃は、クリアなんてできるとは思えなかったな。
攻略本は発売されていただろうが、さすがに買わなかったし……。

それにしても、できればもっと楽しくゲームをしてもらいたいところだ。
和気あいあいと対戦ゲームでもして遊べばいいのに。
……いや、あの3人だと、すさまじい騙し合いとかになりそうだな。
今後もいろいろと意地悪の応酬が繰り広げられそうで怖いが……。
とはいえ、それはそれで、ひとつの遊び方ではあるのか。

☆☆☆☆☆

【ゲーム解説】

「たけしの挑戦状」

対応ハード：ファミコン　発売元：タイトー　発売日：１９８６年１２月１０日

ビートたけしが監修したゲーム。本編でも触れたとおり、クソゲーと言われることも多い。
タイトルが示しているとおり、ビートたけしからの挑戦という感じの作品。
「謎を解けるか。一億人。」というキャッチコピーだった。
とはいえ、この不条理さは、ゲームとしてはどうなのか……。
なお、テレビＣＭには、ビートたけし本人が出演していた。

第4話　スペランカー

カイコ「今回はチョコの担当ね。遊ぶゲームはコレ、スペランカーよ～！」

チョコ「くっ……前回の仕返しかっ！？」

カイコ「ふふっ。べつに、そういうわけじゃないわよ～？
　クソゲーって言われることもあるけど、そうじゃない！
って擁護する声も、
　結構多いみたいだから～」

ミコ「ですが、最弱の主人公とか言われているゲームですよね？」

カイコ「そうね～。1キャラ分くらいの高さから落ちても死ぬし～。
　正確には首の高さくらいらしいけど」

チョコ「やっぱ、クソゲーっぽいぞ？」

カイコ「ふふっ。とりあえず、やってみなさいな。
　ちょっとシビアなゲームかもしれないけど～」

ミコ「頑張ってください、チョコ姉」

チョコ「よっしゃ！　やってやるゼ！」

☆☆☆☆☆

チョコ「それじゃあ、カセットを差し込んで……電源オン！
……おや？」

ミコ「いきなりバグってますね」

カイコ「ふふっ、差し込み方が悪かったのよ」

チョコ「これもよく聞く話だな！」

ミコ「端子部分に息を吹きかけるといいってやつですね！」

カイコ「どこまで効果があるかは、謎だけどね～」

チョコ「ま、やっとくか。ふーふー！」

カイコ「チョコの口臭で、カセットがダメになったりして～」

チョコ「なるか！　っていうか、口臭がひどかったりなんてしないから！」

ミコ「ニオイでダメになるカセットなんて、それこそダメダメだと思いますが」

チョコ「ともかく、気を取り直してスタートだ！　リフトを下ろして……」

カイコ「……いきなり死んだわよ？」

チョコ「ジャンプしないと届かないか」

ミコ「それは当たり前だと思います」

チョコ「ま、さくさく行くゼ！　……うっ」

カイコ「今度はツタから落ちて死んだわね～」

チョコ「こなくそ！」

ミコ「……今度は下り坂でジャンプして死にましたね」

カイコ「ゲームオーバーだわ～」

チョコ「なんだこのゲーム！」

ミコ「ですが、今のって完全にチョコ姉様の操作ミスですよね？」

チョコ「う……まぁ、そうだけど……」

カイコ「しかも、コンティニューできないからね～」

チョコ「裏技とかで存在してないのか？」

ミコ「ないみたいです。諦めてください、チョコ姉様」

チョコ「鬼ゲーか！」

カイコ「まぁまぁ。慣れれば結構いい感じに進めるみたいよ～？
　ステージはたったの４つだけだから、頑張ってね～」

☆☆☆☆☆

チョコ「おっ、なんか出てきたぞ？」

カイコ「ゴーストね～。銃で退治できるわよ～」

チョコ「Bボタンか。えいっ！　む……銃を撃ったら動けなくなったぞ！？」

ミコ「撃っているあいだ、動けなくなるみたいですね」

カイコ「しかも、撃ったあともゴーストは消えながら迫ってくるわ。完全に消える前にぶつかったりしたら死ぬからね～」

チョコ「ある程度離れた位置から撃てってことか」

ミコ「横に向かって撃つグラフィックですが、真上や真下でも効果がありますし、直線距離が近ければ倒せるみたいですね」

カイコ「ハシゴやツタの昇り降り中には使えないけどね～」

チョコ「おっ、今度はコウモリがいるな」

ミコ「洞窟といったら、コウモリが基本ですよね！」

チョコ「何千羽もいて、龍のように連なって洞窟から空に飛び立っていく映像とか、

テレビで見たことあるな！」

カイコ「そんなにいたら、大変なことになるけどね～」

チョコ「そうなのか？　ん？　なにやら変な音が鳴ってるぞ」

カイコ「コウモリがフンをしている音よ～」

ミコ「やけに派手な音を立てながらフンをするんですね……」

カイコ「もちろん、フンに当たっても死ぬわ～」

チョコ「どれだけ精神力弱いんだよ、主人公！」

ミコ「いえ、きっと皮膚から侵入する猛毒を含んでいるフンなんですよ」

チョコ「なぜコウモリは死なない！」

カイコ「ふふっ、自分の毒では死なないものよ～。
ともかく、１匹だけだったら大して怖くないわ。さくっと進みましょう～」

チョコ「でも、上手くタイミングを合わせないと、さくっと死ぬけどな」

☆☆☆☆☆

（操作にも慣れてきたようで、結構さくさく進めるように）

カイコ「いい感じね～」

チョコ「ふっふっふ、オレにかかれば楽勝……ぐっ！」

カイコ「あら、ジャンプミスして穴に落ちたわね～」

ミコ「チョコ姉様、油断大敵です」

カイコ「イージーミスを起こさない慎重なプレイも要求されるわね～」

チョコ「くっ！　オレには向かない気もするが……頑張ってやる！」

カイコ「ふふっ、ガサツで大雑把だものね～、チョコは」

ミコ「それがチョコ姉様のいいところでもあるんですよ」

チョコ「ミコ……無理なフォローはいらないゼ……」

カイコ「あっ、ほら、あそこ！　鍵があるわよ～」

チョコ「そうだな。でも、罠っぽさがプンプンしやがる」

カイコ「手前の地面の下に、大きな穴が開いてるものね～」

チョコ「きっと床が抜ける……とすると、こうだな！」

ミコ「おおっ！　手前の床に着地ですね！　上手いです、チョコ姉様！」

チョコ「ふふん、オレにかかれば、ちょちょいのちょいさ！」

カイコ「……そして、ジャンプミスで穴に落ちて死ぬのね～」

チョコ「くっ……イージーミスが多いな……」

ミコ「チョコ姉様、今度は岩がありますよ」

チョコ「爆弾で爆破するんだな！　……む、死んだっ！？」

カイコ「爆風でも死ぬから、離れないとダメなのよね～」

チョコ「爆風なんて見えなかったのに……」

ミコ「心の目で見るんです！」

カイコ「古いゲームを楽しむには、想像力も必要なのかもしれないわね～」

☆☆☆☆☆

チョコ「ま、慎重にゆっくり進めば問題ないだろ」

ミコ「チョコ姉様が悟ってしまいました。つまらないです」

カイコ「だけど、残念ながらそうもいかないのよね～」

ミコ「そうでした。画面上のエネルギーメーターがなくなると、死ぬんですよね」

チョコ「ひでぇ！」

カイコ「途中に落ちてるエネルギーを拾えばエネルギーがＭＡＸになるから、
上手く進めていく必要があるわ～」

チョコ「どうでもいいけど、エネルギーって、いったいなんだろうな？
この主人公ってロボットなのか？」

カイコ「探検家のはずなのに……変ねぇ……？」

ミコ「まぁ、細かいことは言いっこなしです」

チョコ「次は、トロッコで移動だな。上からなんか出てきてるけど……」

カイコ「毒ガスらしいわよ～。当たったらもちろん……言うまでもないわね～」

ミコ「トロッコなのに、普通に移動できるんですね。つまらないです」

カイコ「アトラクションとかじゃないんだから～」

チョコ「だけど、オレも一気に突っ走るのかと思ったゼ！」

カイコ「そんなことしたら、確実に毒ガスの餌食になるわよ～」

チョコ「ま、問題なく突破。赤と青の扉を鍵で開けて……」

カイコ「おめでとう～！　これで1面クリアよ～！」

ミコ「結構短いですね」

チョコ「大したことないな、スペランカー！　これなら楽勝だゼ！」

☆☆☆☆☆

（2面に入っても、順調に進めていくチョコ）

カイコ「順調に進んでるわね～。つまらないわ～」

ミコ「ガスを噴き出す岩とコウモリのフンのコンボも、さくっと抜けましたね」

チョコ「ふっふっふ、楽勝楽勝っ！」

カイコ「次はツタが連続で並んでる場所ね～」

チョコ「ふっ、こんなの問題なしだゼ！　……おや？」

ミコ「……死にましたね」

チョコ「な……なぜだ～！？」

カイコ「ツタをジャンプで伝っていくときに、天井に頭をぶつけると死ぬみたいね～」

チョコ「ひどいな……」

ミコ「ここまで来たのにゲームオーバーになってしまいましたね」

カイコ「コンティニューできないから、最初からやり直しになるわね～」

チョコ「やっぱり鬼だ、このゲーム！」

カイコ「ふふっ。昔のゲームって、そういうのが多かったみたいよ～」

☆☆☆☆☆

チョコ「ようやく3面まで来たぞ！」

カイコ「お疲れ様～。同じことを繰り返すのって、大変よね～」

ミコ「1度抜けている場所で死んだりもしましたけどね」

チョコ「うるさい！」

ミコ「あっ、水に浮かんでいる壷がありますよ」

チョコ「なんだか、アトラクション的な展開の予感！」

カイコ「でも、そういう展開にはならないのよね～」

チョコ「トロッコと同じかよ！」

ミコ「つまらないです。壷に乗って水の上を流れていく大冒険を思い描きましたのに」

カイコ「まぁまぁ。次は間欠泉の上にボートが乗っかっている感じね～」

チョコ「勝手に床が上下してるだけってことだろ。楽勝だゼ！」

ミコ「油断しないほうが……」

チョコ「うあっ、下りで乗ろうとしたら死んだ！？」

カイコ「予想どおりだけど、落下扱いになっちゃうみたいね～」

チョコ「くそ～。待つのも面倒だけど、上りのときに乗るしかないか」

ミコ「下りでもタイミングを上手く合わせれば乗れるみたいですけどね」

チョコ「ま、難なく突破！」

カイコ「難なくだったかは、ちょっと疑問だけど～」

チョコ「うるさいっての！　ともかく、４面まで来たぞ！」

カイコ「とりあえず、最終面ね～」

チョコ「……とりあえず……？」

カイコ「ふふっ、ノーコメントで～」

ミコ「なんか、怖いですね……」

チョコ「なんとなく、予想がついてしまうんだけど……」

カイコ「気にしないで先に進みなさいな」

チョコ「わかってるよ！　操作に慣れたからか、かなり楽に進めるようになったな～」

ミコ「ランダムアイテムで１ＵＰがいくつか出てましたから、
残り人数も随分と増えてますね」

チョコ「ステージクリアごとに１人増えるってのもあったしな！」

カイコ「つまらないわ～。ファミコン本体に振動を与えようかしら～」

チョコ「ちょっ、やめてくれ～！　ここで止まったら、さすがに嫌だ！」

☆☆☆☆☆

ミコ「鍵の上から、コウモリがフンを落としてきてますね」

チョコ「ふっ。こんなの問題ないゼ！」

（上手くタイミングを見計らってジャンプ、
鍵を取ってすぐジャンプでハシゴに戻る）

カイコ・ミコ「おお～！」

チョコ「ほんとに、楽勝になってきたゼ！」

カイコ「フラッシュで倒すって手もあったんだけどね～」

チョコ「倒したあとに落下してくる変みたいなのに当たってもミスになるなら、
力技で抜けたって変わりないゼ！」

――　そして　――

チョコ「どうやら、すぐそこでゴールみたいだな！」

カイコ「そうね～」

チョコ「ただ、なんかハシゴの位置と床の位置が微妙な感じだな……。

まあ、ジャンプ！　……くっ、失敗か！」

カイコ「残念でした～」

ミコ「落下してしまいましたね」

チョコ「ま、もう1度！　……今度は成功！」

ミコ「扉を開けて、中に侵入ですね」

チョコ「おっ！　これは……宝の山か？」

カイコ「ふふっ、無事クリア、おめでとう～！」

チョコ「やったゼ！　結構長かったけど、確かに慣れれば問題ないな！」

カイコ「ちなみに、2周目以降もあるけどね～」

チョコ「くっ……！　さすがにそれは、やめてくれ！」

ミコ「どうしてですか。ミコはグラディウスを6周クリアまでやらされたんですから、

チョコ姉様だってもっと先まで――」

カイコ「ふふっ、仕方がないから、ここまでで許してあげるわよ～。

本当は2周目以降だと鍵の取り方なんかも変わってきて、

いろいろと楽しくなってくるみたいだけどね～」

チョコ「これ以上続けたら、神経がおかしくなってくるゼ……」

カイコ「あら、慣れたから問題なかったんじゃないの～？」

ミコ「……ミコとしては少々納得がいきませんが……」

チョコ「ミコよりもオレのほうが、カイコ姉に愛されてるってことだな！」

カイコ「そんなことないわよ～？
チョコなんかより、ミコのほうがよっぽど愛しているわ～。
だからこその、愛のムチだったって感じかしら～」

ミコ「そ……そんな愛、ほしくないです！」

チョコ「オレ、カイコ姉に愛されてないのか……」

カイコ「……そんなことでチョコがいじけるとは思わなかったわ～。
意外と寂しがり屋なのね、チョコって。
もちろん、チョコだって愛してるわよ～？」

チョコ「カイコ姉……」

カイコ「というわけだから、今日は愛情がいっぱいつまった私の創作料理を、
たっぷりとご堪能あれ～！」

ミコ「ちょ……カイコ姉様、創作料理とは名ばかりの実験料理は―

―」

カイコ「具材とか調味料とか、いっさい秘密だから、お楽しみに～♪
ふふっ、どれくらい痺れてくれるかしら……」（ぼそっ）

チョコ「今、痺れるとか言ったか！？　なにを食わせる気だ！」

カイコ「うふふっ、楽しい食卓になるわね～♪　私は普通の食事を食べるけど～。
ふたりはしっかり、私の愛を受け取ってね～！」

チョコ・ミコ「断固拒否する（します）！」

☆☆☆☆☆

今日はスペランカーで遊んだのか。
1周目だけとはいえ、よくもまぁ、クリアまで行ったものだな。
俺が買った頃は、せっかくお小遣いを貯めて買ったというのに、
早々に諦めてしまったんだったか……。

慎重に進むなんて、俺の性格では無理だっただけなのだが。
チョコも成長しているんだな。
カイコは意地悪さが成長していそうな気もするが……。

実際、カイコはしっかりと創作料理を作り始めているし……。
もっとも、さっきの言葉とは違って、自分も一緒に食べるつもりのようだが。
さすがに痺れるような料理を作るというのは冗談だったみたいだな。

……どうやったら、痺れる料理が作れるのかは謎だが。

☆☆☆☆☆

【ゲーム解説】

「スペランカー」

対応ハード：ファミコン　発売元：アイレム　発売日：１９８５年１２月７日

サイドビューのアクションゲーム。探検家を操作して、洞窟の奥を目指す。
元は海外のゲームで、それをアイレムがライセンスを受けて発売した。
どうやら元のゲームではファミコン版ほどひ弱な主人公ではなかった模様。

本編で書いていない要素としては、ジャンプで出現する隠しアイテムや、
爆弾で出現するダイヤモンドなどもある。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7085y/

ＲＧＳ ～レトロゲームシスターズ～

2011年12月1日21時59分発行